

第3回プロジェクト研究会①

2001年大阪調査の結果報告

—— 1989年調査との比較から ——

報告者 センター助教授 志水宏吉

2002. 3. 16

まず私のほうからこの調査がどういう調査であるかということをお話したうえで、結果の概要、主に89年調査との比較という観点で、概要をご紹介します。昨年、今年、来年、3年間学力問題について取り組んでいます。今年が2年目で、実際に調査をやりました。2つやっているものの一つが11月に実施した、われわれが大阪調査と呼んでいる調査で、今日はその概要をご紹介します。もうひとつ、関東調査というのをやっており、それは2月に実施、現在業者に採点およびパンチングを依頼しています。年度明けに関東のほうも分析しようと思っています。それぞれ特徴のある調査で、2つの先行調査に基づいた2つの事例で学力の問題を考えていこうということで、荻谷先生と一緒に活動しています。

大阪調査について、元になった調査が1989年で今から12年前ということになります。大阪府下で実施された学力生活総合実態調査というもので、今回の調査はそれに基づいて追調査的な位置づけをもって行いました。中身は学力テストと生活と学習についてのアンケート調査で、これを子どもにやってもらって、比較するというコンセプトです。89年調査、とこれから称しますけれども、これは大阪府下で、同和問題というコンテキストがあって、同和地区の生徒の学力が振るわないという問題状況がずっと続いていたので、それをふまえて同和校を中心とした学校、小学校25校、中学校14校で学力テストと生活実態アンケートを両方実施して学力にどんな要因が関係しているのか、改善の手立てとしてはどういうことがありうるのかということが調査がやられた経緯です。学年は小学校5年生と中学校2年生、テストのほうは、国語、算数、数学と、オリジナルでは中学校英語もありますが、われわれは英語は割愛しました。先行研究をいろいろあつたときに、ひとつの大きな問題関心として、学力の数値を出すことは当然ですがそれを解釈するためのほかの材料がほしいわけです。そういう観点から見たときにこの大阪の同和地区調査というのは非常に参考になった、これ以外はなかったといっているほどで、そういう観点でこれを選んだということです。

学力調査で設定された問題は、当時の小5、当時の中

2を対象にしていますが、そのひと学年前までに習った範囲のなかから非常に基礎的な問題をピックアップして、当時の大阪府下の小学校、中学校の先生方が教科別に集まって問題を作成して実施したものです。国語の場合は、長文読解、文章構成、文法、漢字を大きな領域として設定して基本的な問題が出されています。算数、数学の場合は数と計算、量と測定、図形、数量関係の4領域で問題が設定されています。アンケートのほうは、今回のわれわれの調査は、89年のものからかなり内容を変更しています。子どもの学習面や家庭での勉強に、よりフォーカスをあてた調査票の構成になっています。当然比較がひとつのテーマですので、前回と同じ項目も何割かは設定しています。対象者について、前回は大阪大学が主体になって実施しましたので、大阪大学のほうから情報をいただき、個別に小学校25校中学校14校にコンタクトをとって、だいたい7割強の学校から賛同を得、ご協力いただきました。

次に、内容に入ります。内容に関しては、3つのテーマを設定してご報告します。1番、学力は低下しているか？ 学力の実態はどうかということについて。まず、小学校国語について。たとえば、接続詞の問題は、89年では88.9%は正解、01年は82%が正解、-6.9%になって機械的には下がっているということを強調したいと思います。小学校国語については、全体としては数値は落ちていると言えるかと思います。特に、長文読解で、文法にかかわる事項の低下が著しい。それに比べて、漢字の書き取り、読み取りについては結果はばらついている。上がっているものもあれば、下がっているものもあると、そういう結果になっています。次に、算数です。これも数値は落ちています。特に小数と整数の計算、長方形の求積、さらに、図形にかかわる問題、数量関係にかかわるもの、そのあたりの下げ幅が顕著です。さらに、細かくなりますが、長方形の求積のところで、式があっているかどうかというのがマイナス33.5になっています。ほかにも式の部分が大幅に落ちています。これは、前回のマニュアルに基づいてこちらは忠実に採点していたつもりですが、ひょっとしたら採点基準が厳しかったかもし

れません。また、小学校現場で昔ほど式について言わなくなったので、子どもがちゃんとした式を立てられないというのがあるかと推測されます。

今度は中学校の国語、数学です。中学校の国語は、4つのテストのうちでは、下げ幅が一番少ないと思われまゝ。下がっている項目もありますが、なかには、漢字の読み取り、語彙などかなり上がっている項目もあります。漢字については、その漢字が使われる頻度が時代によって移り変わるとか、子どもたちが学んでいる教材にそれが出ているかいないかとか、そういう要因に左右されることが多いのですが、妥当な結果かとは思いますが。長文読解はやや落ちているという結果がうかがえます。中学校数学については、小学校ほどではないですが、だいたい数値は落ちています。領域別では方程式、文字と式、あるいは整数の性質のあたりで落ちています。ここで、それらにプラスして、通塾の影響というのを数字で出してみました。これは結論だけいいますと、塾に通っている子と通っていない子がいて、昔もいたし今もいますが、当然、傾向としては塾に通っている子のほうがスコアが高くなりがちです。各教科でその通っている子から通っていない子を引いた値を比べていると、格差が大きくなっているものも小さくなっているものも両方あります。ところが、中学校の数学を見ると、これは驚きだったのですが、数学については特に塾に行っている子と通っていない子の格差が驚くほど顕著に出ているのです。

あとは、平均値です。これは、比較可能な問題、たとえば小学校算数だったら33問あるので、これに、33分の100を機械的にかけて、100点満点にしています。そうやってスコアを見た場合、89年の場合は80.6%の正答率で、かなり高かったわけですが、今は69.1%という結果が出ています。各教科5点ぐらいの下げ幅になっていて、小学校算数だけが10点ぐらい低下になっています。得点を「10点未満」「10点台」「20点台」…「90点台以上」というふうに10段階に分けてみたところ、びっくりしたのですが、89年では「90点以上」に4割ほどの子が入っているのに対して、01年では、ずいぶん減っていて、十数%ほどになってしまっていました。高得点層が3分の1ほどになってしまっているのです。それに対して、50点未満の低得点層は、おしなべて増えています。中学校数学も同じ作業をしてみましたら、注目されるのは、01年末の中学校数学、若干ですが、ふたコブになっています。つまり、真ん中が高いグラフではなくて、30点台のところでもう一つのコブができる形になっているのです。

そこで、ふたコブ現象をちょっと考えてみたいと思って次の作業をやってみたわけです。中学校数学、01年が、

塾に行っている、行っていないで分けているのですが、塾に行っていない子でそのふたコブ傾向が非常に顕著であるという結果がでました。学力のふたコブ現象というのはこの調査の限りでは中学校数学にしか見られないし、先生方が実感として感じているものとの基礎的な問題によって測られているものと同一ではありませんので、本当にふたコブがあるかどうかまた別の検討が必要です。しかしながらこのグラフに出ているようなカーブは非常に珍しいと思われまゝるので、注目されるべきだと思います。そこで、中学校の数学で半分しか点が取れなくて塾にも行っていないという子を「学力マイノリティ (GM)」と名づけて、どういう子どもなのかというのをみてみました。塾に通っていない、かつ点数が真ん中より下である子どもは1200人中300人くらいです。以下、全体というのは、1200からGMの300を引いた残りの900人の数字というふうにお考えください。単純なクロスをやってみたところ、「友達と外で遊ぶ時間」というので、かなり差が大きくなっていました。GMのグループは友達と外で遊んでいる。また、家での勉強の仕方、教室の勉強の仕方について、GMと全体で勉強に取り組む姿勢はかなり差が出ています。それとは対照的に、社会観、「だれでもがんばればがんばるだけ人に認められる世の中だ」、「よく勉強した人は幸せな生活を送れる」といった問いでは差がないのです。この結果だけ見たら、塾に行っていないでも勉強ができなくてもわりとハッピーに学校生活を送っていて、将来もそんなに影響を受けないと考えているようにもよめないことはないと思います。

最後に、学力に影響を与える要因、関連構造に変化が見られるかどうかということで、回帰分析というのをやってみました。これはどういうアイデアかといいますと、調査票で89年と01年と同じ項目で聞いているものがいくつかあるので、その中で点数に影響を与えるだろうと想定されるような項目をいくつかピックアップしました。まず、成績・授業の話、これは家に帰ってから成績や授業の話を家族とよくするかどうかという項目です。次に勉強時間とテレビを見る時間です。それから「家で宿題をしますか」「よくする・たまにする・ほとんどしない・ぜんぜんしない」といった問いがあります。家での学習態度という形で出しました。次に自分の部屋があるかどうかです。また、小さい頃絵本を読んできたかどうかというのは、定番の問いで、家庭の文化的環境ということでわれわれがよく知ろうとするものです。塾に通っているかどうか、これは学校以外で教育的なインプットを得られるかどうかということです。学校生活が楽しいかというのは全般的な問いで、学校生活への適応

度を示すものとして出しています。最後に、友達が多いですかというのはそのままの問い方で、「とてもあてはまる・まああてはまる」などです。

回帰分析の結果を簡単にまとめると、次のようになります。まず、小学校の算数では、89年でも01年でも、「宿題をする」という項目の偏回帰係数の値がもっとも大きくなっています。つまり、それが一番大きな影響を与えているということです。さらに、「勉強時間」が二番目に続きます。中学校の数学になると、「塾に通っているか」どうかということが、もっとも大きな力をもつことになります。このサンプルで、という限定つきになりますが、中学校で数学の点がとれるかどうかは、塾に行っているかどうか非常に決定的であり、その傾向はこの12年間の間にさらに強まっているということです。一方、国語の方は数字の出方がちょっと異なっていて、ひとことというと、国語では性別の影響力がかなり強いように思われます。具体的に言うと、女子であると、国語の点がかなり高くなるということです。特に、01年の国語で、男女差が非常に出ています。

最後に、まとめをしておきたいと思いますが、はじめの問いである、「学力は低下しているか」ということについては、この限りでは、やはり低下していると言っているのだと思います。この問題は、89年の時点で大阪府下の同和地区を中心にされたテストです。そこでの算数はクラスの全体の子の平均点が80点ですから、かなりのハイスコアと見ていいと思いますが、それぐらいの点がとれていた非常に基本的な問題です。それが01年に69.1に下がっている。グラフでも90点台の子が激減していたので、その限りでは、下がっているといえます。ただし、それをどういうふうに評価するかというと、ある人たちはこういう結果をみたときに、学習指導要領が変わって時間数が減っているんだから当たり前である、当たり前であるし、これ以外のところに精力を注ぎ込んでいるのであるから、そちらを見ていただかないと困るという議論があらうかと思います。ただし、僕自身の個人的な見解としては、非常にベーシックな問題なので、他の取り

組みをやったってこんなベーシックなところが10点も下がっていたらちょっと困ったなということが率直な感じでした。

次に学力のふたコブラクタ現象ですが、これは非常に限定された形で出てきました。しかもっとこのデータの範囲内でも丹念に見ようと思えば出てくるので、自分自身の今後の課題にしたいと思います。したがって一般的に言うと、以上のことを併せ考えると、学力の水準がこの指標で見た限りでは下がっていると思います。学力の格差もやはり拡大しているという結果になっています。通塾については、やはり僕自身データを処理していて、塾の力が強まっていると思えました。塾に行っている子と行っていない子の格差がこれだけ、特に中学校数学で顕著に出てくるということは問題視してもいいでしょう。全体として低下傾向にあるということについて、ひとつは、大阪の教師が非常に80年代ががんばっていたという可能性があるようにも思います。それは同和教育等々で加配教員の数も多かったわけで、丹念に一人一人の子どもの、特に低い学力の層の子をみることができた。今でも当然ががんばっていらっしゃるわけですが、教員は削減されていますので、そのケアが行き届かなくなっていることの表れであるという部分がたぶん関係しているかと思っています。もうひとつ推測ですけれども、89年というのは現行のカリキュラムのひとつ前です。それで教育の人間化というスローガンがあって、ゆとり教育が行われはじめた最初のカリキュラムですが、今と比べるとまだかなりつめてやっていたと思います。01年というのはその後のカリキュラム下ですから、変わったわけですね。現場にもいろんな力が加わって授業を変えないといけないとか、新しい学力観だ、総合学習だという、ある種の現場に混乱というか、そういうものがあつたようにもよめると思います。下がっているのはその混乱の影響によるもので、2002年からは新しいのが始まるし、先生方も新しいシステムになれて新しい力を備えるようになるので、数年すると結果が上向きに転じるという可能性もなくはないと、そんなふうに思います。